

# 総合的な学習の時間における検証と今後の方向性について

佐方 はるみ

九州女子大学人間科学部人間発達学科 北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2020年10月29日受付、2020年12月1日受理)

## 要 旨

本学教職課程で小中学校教諭(国語、家庭科)、特別支援学校教諭、栄養教諭、養護教諭の免許を取得する学生は多い。総合的な学習の時間が平成10年(1998)の学習指導要領改訂で創設された新しい時間である。自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する学びの姿は当時とても新鮮で新しい風が吹いてきたかのように現場はどこも現実社会から問題を見だし、個人の興味関心等多様な視点から学校や地域の特色を出しながら取り組んだ。しかし、10年20年経つにつれゆとり教育の弊害のように言われ、暗記は得意だが、思考力・判断力・表現力に課題があることが指摘された。総合的な学習の時間は探究のスパイラルである。コロナ禍でのアクティブラーニングは困難であるが、大学生が小中学校で総合的な学習の時間で何をどのように学んだのか、どんな体験活動をしたり、探究学習をしたりしてきたのか等の実態を検証し、平成29年(2017)改訂の学習指導要領改訂に示された資質能力を育てる学習、時代のニーズに応じた内容、総合的な学習の時間の意義と必要性等が明らかにし今後の方向性を探る。

## 1 はじめに

### (1) 総合的な学習の時間創設から返還

総合的な学習の時間は平成10年に創設された新しい時間である。知識主導型の学習から教科横断型の問題解決型学習へとシフトし、どんな子供を育てたらよいのかと、各学校が地域や学校の実態から教師も子供も自ら学び自ら考える「新しい学力観」として、教育課程編成に小中高校に設置すべき時間として位置付けられた。ここで平成10年(1998)の学習指導要領が目指していたものから、改めて総合的な学習の時間の意味を考えてみる。当初は教科書のない年間100時間を超えるこの時間を「何をしてもいい時間だけれども、何をすればよいかわからない、何を課題にして、何を子供たちに身に付けさせればよいかわからない」といった現場の試行錯誤の時期が続いた。しかし、この試行錯誤の時期が最も教師が再度「学び方や探究学習とは」を学んだ時期でもあった。その後平成12年に実施されたOECDの国際学力調査(PISA)は大きな影響を教育関係者に与え、平成20年(2008)に学習指導要領が改訂され、総合的な学習の時間も課題に応えるためにその目指す目標や育成する資質や能力、態度がさらに明確になった。しかし、実践を積み上げ、地域に根付き大きく成果をあげている学校の一方で、体験のみで終わっている、「どんな児童生徒を育てるのか」といった共通理解がない、教師の多忙等、課題は残されている。平成28年の中央審議会答申においては<sup>(1)</sup>、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る」という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、学習指導要領等が、学校、家庭、地域の関係者が幅広く共有できる「学びの地図」としての役割を果たすことができるよう、次の6点にわたってその枠組みを改善するとともに、各学校において教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す「カリキュラム・マネジメント」の実現をめざすことなどが求められた。

- ① 「何ができるようにするか」(育成を目指す資質・能力)
- ② 「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科間・学校間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
- ③ 「どのように学ぶか」(各教科間の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
- ④ 「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
- ⑤ 「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
- ⑥ 「実施するために何が必要か」(学習指導要領の理念と実現するために必要な方策)

これを踏まえ、平成29年3月31日に学校教育法施行規則を改正するとともに、幼稚園教育要領、小学校学

習指導要領及び中学校学習指導要領を公示した。

改訂の基本方針には、改訂の基本的な考え方、育成を目指す資質・能力の明確化、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの推進、教育内容の主な改善事項が述べられている。

本年度のコロナ渦では、学校現場での総合的な学習の時間は、人との出会いや体験ができなくなった。小学校ではプログラミングが導入され小学校教師を目指す学生にもその知識・理解・技能が求められる。時代のニーズに応じて求められる内容は変わってくるが、育てる資質・能力について今回の改訂は、全教科等で共通している。そして、総合的な学習の時間の目標も明確に次の通りに改訂された。どんな点が総合的な学習の時間の特性をより明確にしたものか改定前と改定後を比べてみた。

<改訂前> 平成27年一部改正（学習指導要領 総合的な学習の時間編）<sup>(4)</sup>

#### 第1 目標

横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方考えることができるようにする。

<改訂後> 平成29年告示（学習指導要領解説 総合的な学習の時間編）<sup>(5)</sup>

#### 第1 目標

探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 探究的な学習の過程において、課題の解決に必要な知識及び技能を身に付け、課題に関わる概念を形成し、探究的な学習のよさを理解するようにする。
- (2) 実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立て、情報を集め、整理、分析して、まとめ・表現することができるようにする。
- (3) 探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。

3つの資質・能力(1)では「知識及び技能」、(2)では「思考力、判断力、表現力等」、(3)では「学びに向かう力、人間性等」を示している。

改定前後を比較すると、平成29年告示では、探求的な学習の一層の充実が求められている。探究学習のプロセスが子供の姿として、①課題の設定→②情報の収集→③整理・分析→④まとめ・表現といったプロセスの繰り返しの中で育てる資質・能力がより明確化されている（平成29年学習指導要領解説総合的な学習編p9）。この過程を通して、教科等全体を通してのカリキュラム再編成をすることにより、知識や技能、思考や判断、表現、意欲や態度に関する資質・能力を育てる各学校における・カリキュラム・マネジメントとの整合性や関係が一層求められている。そこに総合的な学習の時間の要素である体験活動が必ずどんな形であれ、各学校の特色や実態に応じて学習過程で実施されている。

総合的な学習の時間が創設から、今日まで課題もより見えてきた。また、2007年から「全国学力・学習状況調査」が行われ、調査結果に各都道府県・学校が数値を上げる対応に追われ、生活状況の課題も明らかになってきた。道徳科のように教科になることもなく創設当初のまま実社会・実生活を教科書にしてきた。育てる資質・能力が明確に示され、課題設定、探究学習、体験学習も変わらない。実際の現場で総合的な学習の時間について、先行研究や本学生の調査から探りたい。

#### (2) 研究の目的

本研究は、小学2、3年生小学校中学校教員免許取得必修科目である総合的な学習の時間受講生の小中学校での学びの実態を知ることから、受講生がどのような体験し何を学んだのか等、問題の所在を明らかにす

るとともに、学習指導要領改訂の変遷から総合的な学習の時間の成果と課題を検証し、今後の方向性を探る研究とした。

### (3) 方法

- ① 先行研究の検討から
- ② 総合的な学習の時間本学受講生アンケート調査から
- ③ 総合的な学習の時間実践から

## 2 先行研究の検討

総合的な学習の時間の教育現場の問題・課題として、水口 洋<sup>(1)</sup> (2015) によると、総合的な学習の時間における「課題発見・論理的思考力」「理論的思考力」の育成の方向は、日本の教育の現状を考える上で本質的な問題提起の機会であった。それは、「詰め込み教育」から「独創的教育」への転換であり、「系統学習」から「教科横断的学習」への移行であり、「画一的教育」から「学校独自の教育」への踏み出しであった。そうであるにもかかわらず、この総合的な学習の時間への研究協議は深まることなく、一部の実践事例のみが報告される程度の結果しか生み出せず、「ゆとり教育」批判と「確かな学力」の育成の流れとともに、実質的な研究の深まりを持たずに形骸化されつつある現状について、独自教育の困難さをあげている。総合的な学習への積極性が失われつつある第一の理由は、日本の学校教育が上級になるほど「教科の枠」にとらわれている点を上げることができる。小学校において実験的・独創的な試みが多く行われている割に上級学校においては形式的な対応が当初から多く見られるのは、教員が教科教師として採用され、各教科の専門性を追求することに優先順位が置かれ、教科横断的な学習プログラムが成立しにくい状況がある。(中略) 総合的な学習の時間を設定するに際し、「現場に丸投げ」される形で開始された。

水口は、総合的な学習の時間の創設からの課題を述べている。本稿は教科書のない総合的な学習の時間がこれからの21世紀型の教育を目指し、生きる力を育むエネルギーの源なることを期待しながらも20年以上の経過した現状は、水口の述べている通り上級学校に上がるにつれて形式的な学習になり、学校間格差が実践に現れたこと、その継続やカリキュラム・マネジメントの問題があると述べている。

グローバル化、経済発展は年々進み、本年度は世界的感染症（コロナウイルス）による衣食住の日常生活、医療、教育、環境等、新たな課題が現れたと考える。それは、総合的な学習の時間の今までの授業形態や内容をも変えざるをえないものとなった。

勝田 みな<sup>(2)</sup> (2009) は、「総合的な学習の時間」の課題のこれまでの成果と今後の課題について、小学校における「総合的な学習の時間」を中心にしての中で、創設時から20年が過ぎ、各学校がそれぞれの創意工夫をもって取り組んできた。総合的な学習の時間が各教科等と関連しているのは、明らかになったが、キャリア教育と相互に関連している時期とほぼ同じである。各教科等で身に付いた資質・能力を基礎に、児童の「基礎的・汎用的能力」を十分に育成していくことは可能である。今後さらに総合的な学習の時間の充実をめざすにあたって、次のような課題がある。一つ目は、育成する資質・能力の視点。学校全体で育てたい資質・能力に応じたカリキュラム・マネジメント。二つ目は、探求のプロセスに関する視点である。

水口、勝田の共通しているこれまでの総合的な学習の時間の課題は、共通している。小中及び学校間格差。そして、学校全体のカリキュラム・マネジメントである。もう一つは、探究学習のスパイラルによって育っていく姿であり、培われる能力である。その探究学習の価値は両者とも変わらないと考える。

平成29年告示学習指導要領で、明確にされた3つの資質・能力明確にされ、総合的な学習の時間の特質と、目指す目標がしめされたが、横断的・総合的な学習を実践することを通して、よりよく問題を解決し、自己の生き方考えていくための資質・能力を育成することは総合的な学習の時間の特質であり、学習過程である。探求的な学習における児童の姿は、創設から変わらない総合的な学習の時間の学習の在り方である。

しかし、子安 潤<sup>(3)</sup> (2019) は、探求する授業について次のように述べている。2018年の告示された学習指導要領では、「思考力・判断力・表現力等の育成」のために、各教科等の指導のなかで「知識・技能を活用する学習活動」と充実させるとともに「教科等を横断した課題解決的な学習や探求的な活動」を充実さ

せることが求められた。さらに2017・2018年に告示された学習指導要領では、「横断的・総合的な学習や探求的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方考えることができるようにする。」と記され、さらに高等学校では、「古典研究」や「数理研究」など「探求」を冠した科目名が示された。こうした背景には、「知識基盤社会の到来」と、コンピテンシーやリテラシーと呼ばれる新しい能力、すなわち汎用的な資質・能力の必要という捉え方がある。しかしながら、探求型の学習は、デューイにより、重視され、日本では大正自由運動や戦後の生活教育において「プロジェクト活動」という形ですでに注目されてきたものである。

探求的な学習あるいは探求的な活動により、実生活の問題について子供がたどりつくべき答えを限定せずに、可能性を模索し、結論が正しいかどうか、子供たちが自分で検討し分析し、次の学びにつなげていくのである。(中略) 探求的な学習を支えていく実生活における疑問や関心、多面的・多角的な見方や刺激や経験が探求的な学習を支えている。このような学びのプロセスを最初に明示したのは、ジョン・デューイである。デューイは、5段階の反省的思考と伴う問題解決の過程を「単元」(学習活動のまとめ)とみなした。探求過程には2つの過程がある。1つは、教科横断的なテーマ学習、つまり総合的な学習の時間に実施されるような探求的な学習(プロジェクト学習とほぼ同義)。もう一つは、教科の基礎的知識・技能の習得やその活用の際に必要なとされる探求的な学習である。このタイプの学習を問題解決学習と呼ぶことがある。探求的な学習の展開には、前者のプロジェクト学習と、後者の「習得・探求・活用」の場合の実生活で直面する問題の解決を通して、基礎的知識と実生活をつなぐ知識の習得や、問題解決に関する能力や態度などを身に付ける学習となりやすい。

子安は、探求的な学習と言ってもさらに展開において深めている。一つは「〇〇プロジェクト」やバザールや地域おこし等によく実践されている。もう一つは、実生活での直面する問題解決を通して資質・能力、態度を身に付けていく実践と考える。両方とも探究学習であるが、内容面で発信の仕方や実現、追求過程での学び方や自己の生き方等により深く関わる点においてであり、筆者の実践もこの点において検証することとする。

### 3 総合的な学習の時間本学受講生アンケート調査

#### (1) 調査について

本学総合的な学習の時間受講生2,3年生は、平成10年(1998)の総合的な学習の時間が創設された1,2年前に生まれ、それから10数年の間に小中学校で総合的な学習の時間を体験している。そこで、以下の調査をした。

#### ○対象学生・人数

- ・人間科学部人間発達学科発達学科「総合的な学習の時間指導法」 受講2年生 44名
- ・本学家政学部人間生活学科・栄養学科「総合的な学習の時間指導法」 受講3年生 52名

#### ○実施日 令和2年(2020)9月16日(水)

<問1> あなたは小学校の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか?

あてはまる番号に○をつけ、その他にもあれば書いてください。(複数回答可)

<問2> あなたは中学校の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか?

あてはまる番号に○をつけ、その他にもあれば書いてください。(複数回答可)

- ア 地域を中心にした学習
- イ コンピュータを使つての情報処理や活用
- ウ 国際理解(外国語活動を含む)
- エ 福祉
- オ 環境
- カ その他

<問3> 印象に残っている授業や体験があれば書いてください。

上記の質問内容でアンケート調査をした。

<問1-1> 小学校の時 2年生 44名

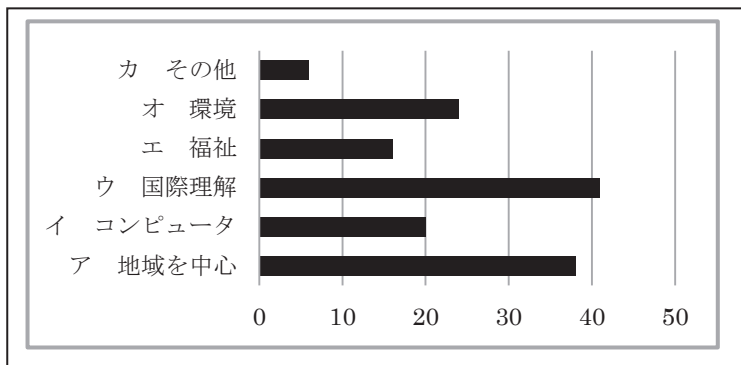


図1 <問1-1> あなたは小学生の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか？  
(複数回答可)

○上記の項目(ア～カ)の内容を(人数の多い順)記述

- ア お店体験、地域の歴史、会社調べ、祭り調べと出演、伝統、米や野菜作り、川調べ
- イ ソフト活用、タイピング、ゲーム、カレンダー作り、パワーポイントで発表、イラスト描き
- ウ 外国人やALTとの交流と発表、興味のある国調べ
- エ 年長者との昔遊びや交流、施設訪問と交流、車いす体験、年長者体験、点字、手話
- オ リサイクル活動、川の生物調べ、地域清掃、地球温暖化、エコ活動
- カ 清掃活動、肥料作り、田植え、かかし作り、茶道体験、平和学習、2分の1成人式

<問1-1> 小学校の時 3年生 52名

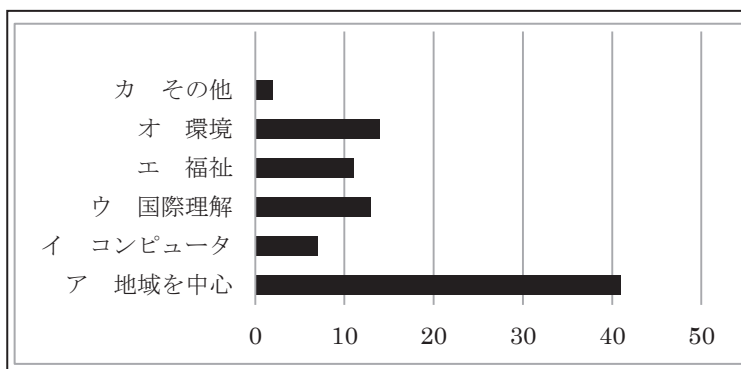


図2 <問1-2> あなたは小学生の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか？  
(複数回答可)

○上記の項目(ア～カ)の内容を(人数の多い順)記述

- ア 米や野菜作り、地域年長者との昔遊び、お店体験、地域調べ、祭りに参加
- イ ソフト活用、文章作り、調べ学習、タイピング、地元の観光名所作り
- ウ 外国人やALTとの交流(遊び・文化・料理)、外国の料理作り
- エ 車椅子体験、年長者交流、施設訪問と交流、車いす体験
- オ 清掃活動、リサイクル活動、水質調べ、地球温暖化
- カ 名産品・野菜作り、田植え

＜問2-1＞中学校の時 2年生 44名

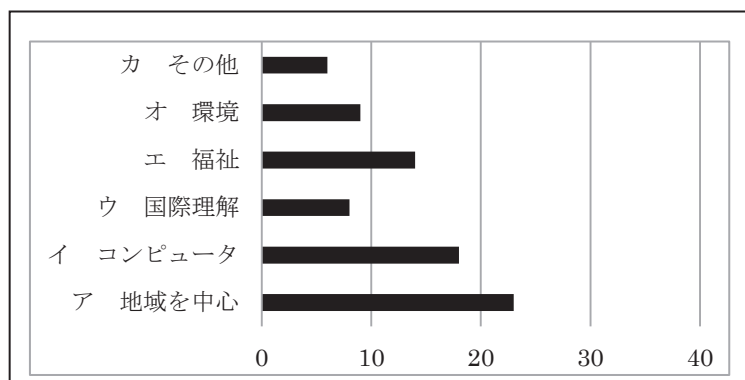


図3 ＜問2-1＞ あなたは中学生の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか？  
(複数回答可)

○上記の項目（ア～カ）の内容を（人数の多い順）記述

- ア 職場体験、米作り、農泊、地域清掃活動
- イ プレゼン作り、タイピング、ワードやエクセル、プログラミング、HP作り、情報処理
- ウ 修学旅行でのインタビュー、外国の行事調べ、海外研修、留学生との交流
- エ 施設訪問と交流、点字、車いす体験、人権や差別について、福祉サービスについて
- オ 清掃活動
- カ 平和学習、修学旅行、LGBTについて、自分の興味・関心のあること

＜問2-1＞中学校の時 3年生 52名

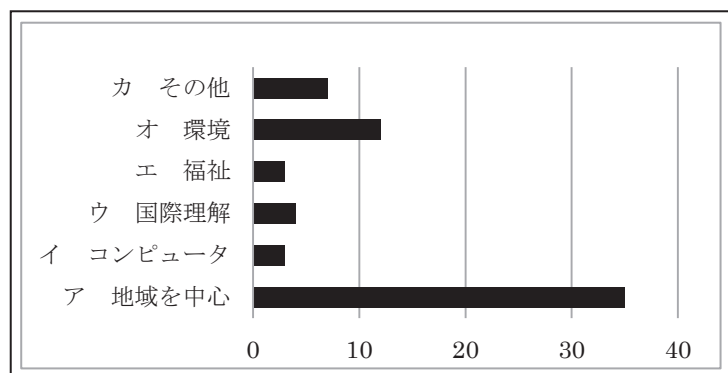


図4 ＜問2-1＞ あなたは中学生の時に総合的な学習の時間の授業でどんなことをしましたか？  
(複数回答可)

○上記の項目（ア～カ）の内容を（人数の多い順）記述。

- ア 職場体験、米作り、郷土料理作り、地域新聞作り
- イ データ処理、調べ学習、タイピング、プログラミング、カレンダー作り
- ウ 外国人・留学生との交流異文化理解、
- エ 施設訪問と交流、ユニバーサルデザインについて
- オ 清掃活動、地球温暖化
- カ 弁当配り、門松作り、手話大会

＜問3＞ 印象に残っている授業や体験があれば書いてください。＜2年生44名＞

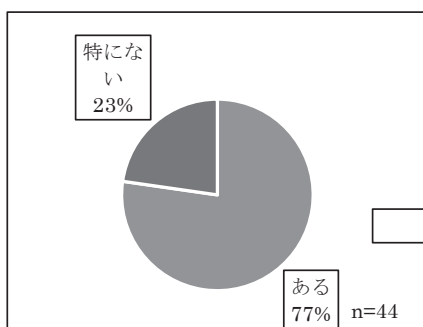


図5 印象について

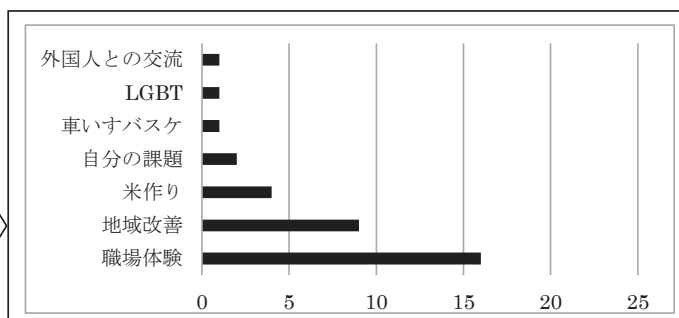


図6 どんな授業や体験活動について

＜問3＞ 印象に残っている授業や体験があれば書いてください。＜3年生52名＞

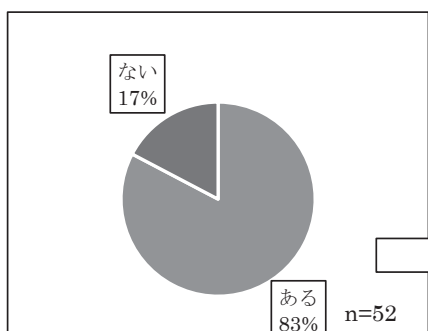


図7 印象について

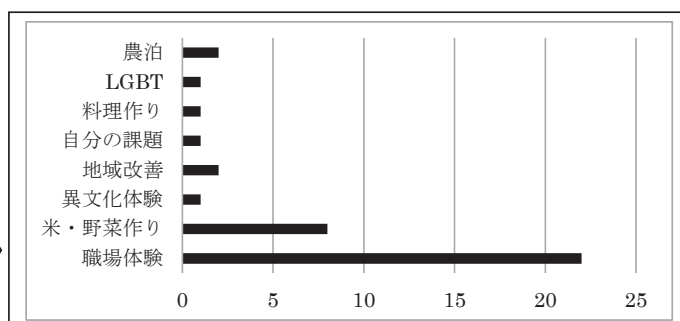


図8 どんな授業や体験活動について

(2) 調査結果について

今回初等総合的な学習の時間受講生2年生44名と、中等総合的な学習の時間受講生3年生52名のアンケート調査を実施したが、複数回答としたことから、2年生は初等受講生ということで小学校の方に視点が集まったようで、回答数が多かった。反対に中等受講生は中学校に視点が集まり関心の差が表出された。アンケート調査をもっと丁寧に説明する必要があった。

＜問1＞ 「小学校の時に総合的な学習の時間でどんなことをしましたか？」について

初等受講生2年生回答の小学校の方は、小学校英語が教科ではなく、「英語に慣れ親しむ、コミュニケーション活動の基礎を培う」等、ALTとの触れ合いに大切にしたこと。又、外国語活動が国際理解教育の一環であったことにより地域の活動より、国際理解が1番多かった。しかし、中学生になってみれば、小学校外国語活動は英語であるという認識が強く表出されたと考える。また、総合的な学習の時間で英語活動を実施していた小学校もあった。調査内容に小学校での国際理解の定義が曖昧であったことが課題であった。中等受講生3年生は地域中心が1番多い。両学年とも地域を中心にした数値が高かった。小学校では、お店体験、地域に関わる歴史や伝統、地域に田や畑がある立地性によると考える。

やはり、小学校4年生から中学校3年生までに、小中ともに、身近な地域の「人・もの・こと」を教材にした授業であったことがわかる。このことは、小中学校とも学校全体のカリキュラムの中で地域を中心にした活動が位置づけられ、引き継がれていると考える。

＜問2＞ 「中学校の時に総合的な学習の時間でどんなことをしましたか？」について

初等受講生2年生回答の中学校の方は、各項目に極端な差はないが、やはり地域中心の授業が1番である。中等受講生3年生の方も地域中心が圧倒的に多い。中学生になり、英語が教科となり、国際理解という定義

が小学校とは違う活動になったとからである。地域を中心にした授業の次は環境や福祉が多くなっているが、ごみ拾いや清掃活動をしたことのみを環境と捉えているのは問題である。また、情報教育もコンピュータを使うことが当然ながらより高度になっている。気になるのは、情報モラルという点である。それを書いている学生はいなかった。質問がコンピュータとしたので、使いこなすことのみを思ったとすれば質問に詳細な内容項目が必要であった。

中学校では、ほぼ職場体験をしている。キャリア教育の一環として実施していると思うが、学生の安価には、病院や介護や福祉施設等での職場体験を福祉と捉えている者もいる。キャリアと福祉では、その目的や学び、授業後の考えも違ってくるはずである。

小学校でのお店体験から職場体験がキャリア教育の一環とされるなら、小中での共通したカリキュラムや連携が必要と考える。楽しんだ小学校でのお店体験から職業としての体験は、その後の学生の進路にも影響を与えている。

### <問3> 「小中学を通して印象に残っている授業、体験活動はなんですか？」について

2年生44名、3年生52名ともに、印象に今でも残っていると答えた割合が80%程である。その項目も圧倒的に職場体験であった。社会に出る一歩であり、学校という場を離れて社会人と出会い、職場に通い、そこで何らかの仕事をする体験は新鮮であったと考える。また、職場の人は地域の人であり、地域に住んでほしいとも思ったと予想される。学生達は「地域の人たちが優しくかった」と言う。反対に自分の思いとは違った職場を体験した学生は、自分の職業の選択しからは外れるようだ。

米や野菜作りも印象に残っているが、何のためにしているのかよりも体験活動そのものが楽しかったようだ。田植えも稲刈りも野菜創りも収穫の喜びが伴う。小学生で体験した芋ほりもそうである。

中学校では、職場体験の次に地域改善が多い。地域の問題に気付き、自分の問題解決したいことをグループとする探究活動である。もっと詳細に地域の何をどのように改善しようと中学生なりに考えたのか、発信したのかを次回の課題として聞きたい。さらに小学校の時にはなかったLGBTや修学旅行で外国人と話すことにより、英語力を試す能力発揮の場としての活用、また修学旅行そのものを時間合わせのために総合的な学習の時間としていることもうかがえる。

上記の質問内容から、わかることは今後のより詳細な調査からもっと明らかにしていくべき課題がある。先行研究での水口、勝田の総合的な学習の時間の創設からの課題の一端は、本調査にも表れている。探究的な学習過程があったのであれば、総合的な学習の時間の単元名を大学生が覚えているのか、またごみ拾いや清掃活動と書くのか、体験そのものが総合的な学習の時間であり、行事やイベントとして存在していること。担任や教師一人では、特に複数学級では活動が困難な面がある

また覚えたり身に付けたりした知識・技能が活用されているのかも疑問に感じた。ただ、大学生になり総合的な学習の時間が他の教科等のように鮮明ではなかった。今回の調査でも「総合って？何のこと」という声もそれなりに聞こえてきた。多分テストがない、成績にあまり関係しないといった存在なのかもしれない。

子安は、前述で探究学習について二つのことを述べているが、どちらにも当てはまらない体験のみかもしれない。そう考えると平成29年告示の学習指導要領改訂での全教科等で育てる3つの資質・能力を授業、そのための授業改善としての「主体的・対話的な深い学び」というのは、総合的な学習の時間で最も活用され発揮される価値があると考えられる。教師を目指す本学教職課程での総合的な学習の時間は、過去での体験からこれからの学びに繋ぐことが問われている。小中学校での事例から、価値ある総合的な学習の時間の単元構成や実践を学ぶことから始めたい。

## 4 総合的な学習の時間実践検証

### (1) 本実践例について

北九州市門司区の公立小学校の在任していた際の実践から検証した。平成11(1999)、12年2000)の実践であるが、平成10年(1998)に総合的な学習の時間が創設され、日本全国どの学校も言っている程教科



書のないこの時間で「何をどうすればいいのか」と試行錯誤していた時期でもある。前述したとおり、この時期が最も総合的な学習の時間の学習が各学校で実践され、どの公開授業も発表会もこぞって参加していた。この頃も、アンケート調査でもあったように地域を中心とした学習は殆ど学校で実践されていた。教科での学びを定着・発揮することで、より教科等の授業で基礎・基本の大切さを痛感させられた時間でもあった。そこで児童の実態調査から、育てたい資質・能力を設定し問題解決学習に児童が共同して探究活動をした。

1、2年生の生活科から3年生以上の総合的な学習の単元は1年間で50時間程度を年間実施していた。6年生を例に下記に挙げると、総合と教科等が横断的総合的に計画されている。

表1 6年生総合的な学習の時間と各教科等の指導計画例<sup>(6)</sup>

総合	単元名「私にとって生きるのに必要なことは」	単元名「私達のまち 門司港レトロから発信」
国語		○調査したことを
理科	○体のつくりとはたらき	
社会		○明治の新しい世の中 ○みんなの願いを実現する政治
図工		○フリーマーケット作品作り
体育	○健康な生活	
特活	○私の健康生活	地域に役立つことを決めよう

また、生活科は教科書に沿って、総合的な学習の時間に繋ぎ、全学年を通して育てたい資質・能力が示されている。6年生実践事例以外は単元名とする。

表2 育てたい資質・能力全体計画例<sup>(7)</sup>

	育てたい資質		伸ばしたい能力	
	主体性	創造性	表現力	情報活用能力
	自ら課題を見付け、計画を立て問題を解決する	身近な生活や地域との関わりを重視した体験(的)活動を生かす	自分の考えをあらゆる場で表すことができる	情報や資料を活用して、自らの考えを深めていく
1年	生活科単元「きせつを食べよう 夏」「きせつを食べよう 秋」			
2年	生活科単元「バスにのって、めかりに行こう」			
3年	総合的な学習の時間「わが町大好き 門司港わくわくたんけんたい」			
4年	総合的な学習の時間「発信！レトロより 愛をこめて」			
5年	総合的な学習の時間「お米博士になろう」			
6年	総合的な学習の時間「私達のまち門司港レトロから 発信！」			
	門司港レトロについて各自課題をもち追求する。	職業体験活動・フリーマーケットへ参加する。	ポスターセッションなどで効果的に表現する。	北九州観光協会・門司港レトロ倶楽部・門司区役所などでインタビューする。

表3 6年実践例 単元の流れ<sup>(8)</sup>

	6年生 総合的な学習の時間単元「私達のまち 門司港レトロから発信」、23時間
<出会う>	文明開化の学習から、門司港レトロの歴史探しをしよう
↓	・明治や大正の建築が集まっている。 ・開発によって変わってきた。港が重要。
<つかむ>	門司港レトロで、自分の調べたい課題を決めよう
↓	・観光客が増えた。 ・バナナの叩き売り発祥の地。 ・貿易会社や倉庫が沢山ある。
<調べる>	自分達で調べよう。体験してみよう。話を聞きに行こう。・貿易会社を訪問し話を聞こう。
↓	・レトロ建築の歴史を調べ観光ボランティアになろう。・レトロ開発の仕事をする所に行こう
<深まる>	調べたことを中間発表しよう
↓	・レトロ観光のお店の店員さんになって、レトロ観光の特徴を探ろう。
<生かす>	それぞれがどう関係しあっているのかまとめよう。
	門司港レトロのよさを伝え、自分たちが地域や学校のためにできることはないだろうか。

上記の主な流れを例示したが、23時間の単元構成と学習活動の過程で1人の前学年から保健室登校・不登校を繰り返し、5年に進級し投稿はするが覇気がなく人とあまり話さなかった。私は、A児がこの学習で変容したことが忘れられない。総合的な学習の時間が他の教科等とは違う価値や力を見いだしたと言っても過言ではない。A児が不登校になった原因は別として、本単元を学習過程の一部をA子を通して探る。

- 前頁表2にあるように、A子は本単元学習で門司港レトロにある観光店名物の加工天ぶら店で3日間店員さん達と働くことにした。名物の天ぶらは5年生の時に工場見学にも行っている。体験するまでの過程は省略するが、体験初日は、迎えに行き場所の確認とあいさつをした。店員さん達は殆どが50代であった。いろんな活動をしている児童には、自分で学校まで帰って来る確認をしていた。A子の方が心配だったので陰から見ていた。2日、3日と経つうちにA子が「いらっしやいませ。ありがとうございました」と言って表情が変わってきたことが見て取れた。学校に戻って、自分達の学習のまとめや問題解決、地域のことを継続したのだが、A子は、一人で登校するようになった。お店の人からこんなメッセージを貰っていた。「短い三日間でしたけど、少しでも門司港レトロのことが勉強できたと思います。これからも皆にレトロのよさを広めてください。特に26日は大変助かりました。ありがとう。」という内容であった。A子のノートには、「私がお店に行った天ぶらの〇〇の店員さん達は、私がきちんと何をしていいのかわからなかった時、優しく教えてくれて、私はとてもうれしかったです。校長先生も買いに来てくれました。」とあった。その後学校生活は水を得た魚のように生き生きしてきた。彼女の母親よりこんな手紙をもらった。「この学習で楽しい体験がたくさんできたようです。私よりもずっとたくさん門司港レトロが理解できているのではないかと思います。教室の中で知るだけではなく、自分達のあいだで得たもの、学んだものは、ずっとしりと身に付いてと思います。そして、自分の足でやったということが、これから先何かに挑戦する時の自分につながるのではないのでしょうか。貴重な体験をさせて頂き……」とあった。その彼女も成人し、選んだ職業が言語療法士と母親から聞き、もう35歳になる。不登校で人とあまり関わらず話さなかった彼女が人と話すことやその回復、コミュニケーションに係る職業に就いているのである。

## (2) 実践例からの総合的な学習の時間検証

### ① 検証1 教科横断的カリキュラムの必要性について

水口(2015)<sup>(1)</sup>は総合的な学習の時間は「詰め込み教育」から「独創的教育」への転換であり、「系統学習」から「教科横断的学習」への遺構であり、「画一的教育」から「学校独自の教育」への踏み出しであった。そと述べており、総合的な学習の時間が形骸化されている点を述べている。本実践のA児は、3日間だけの体験にも関わらず、その後も門司港駅前フリーマーケットに参加し、自分からレトロ地域のよさを配るピラを積極的に配ったり、清掃活動をしたりしていた。地域の人・もの・ことが彼女に生きる力と自信を与えた。

生きる力を育てる総合的な学習の時間は貴重である。本実践例においても全学年を通して教科横断的なカリキュラムと育てたい資質・能力を学校全体と教師が共有していたからこそ、地域を中心にしながら調べていく過程ではメモを取る、字を書く、計算する、話を聞きとる、必要な知識等様々なことが要求される。教科学習での基礎・基本を定着させ生かすことが必要と考える。

### ② 検証2 生きる力とキャリア教育について

勝田(2009)<sup>(2)</sup>は、総合的な学習の時間がキャリア教育と相互に関連している時期とほぼ同じであると述べている。自己の生き方を考えることは、小学校学習指導要領(2017)では「一つは人や社会、自然の一員として、何をすべきか、どのようにすべきかなどを考えることで、低学年における生活科の学習の特質からつながってくる場面でもある。二つ目は自分にとっての学ぶことの意味や価値を考えていくことである。三つ目はこれらをいかしながら学んだことを現在及び将来の自己の生き方につなげることである(一部抜粋)」と提示した。自己の生き方を考えていくには、キャリア教育と関連付けて、探究活動と自分自身、他者や社会からの学びの過程をイメージしていくと理解しやすい。キャリア教育における「基礎的・汎用的能力」の育成にもつながり、実社会・実生活の中から問いを見だし、探究する活動を通じて、自己のキャリア形成の方向性と関連づける部分として考えることも可能である。と述べている。

A子はこの体験は、将来の自分に繋がった。キャリア教育を目的とした実践ではないが、主体性や意欲が芽生えたことにより、自分をみつめ、自分の力でやれる自信になった。新学習指導要領の目標は横断的・総合的な学習を行うことを通して自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成するとある。3つの資質・能力は、総合的な学習の時間創設時からの不変である。

### ③ 検証3 探究学習について

子安(2019)<sup>(3)</sup>は、探究学習の過程には2つの過程があると述べている。1つは、総合的な学習の時間に実施されるような教科横断的なテーマ学習。もう1つは、実生活で直面する問題の解決を通して、基礎的知識と実生活をつなぐ知識の習得や解決に関する能力や態度を身に付ける学習となりやすい。

本実践について、明確に線引きができるものとは考えないが、前者に近い。どうしても解決しなければならない課題解決学習ではないからである。ただ、解決しなければならないと思う問題に直面することもあると想定される。2つの探究学習の過程が相互作用することもあると考える。

## 5 おわりに

3つの方法で検証を行ってきたが、現状は、総合的な学習の時間が価値ある時間にするにはかなりの困難さがある。20時間、30時間と時間かけて単元構成や教科横断的なカリキュラムを学校全体で作成することの困難さ。作成して、それを多忙な教員集団が連携共有し実践する時間がない。総合的な学習の時間の単元と実践に教師が価値を見だしてこそ、受け継がれ新しい課題が生まれる。コロナ禍で学校ができることは少ないかもしれない。しかし、コンピュータを活用して情報収集し考えたり、疑問に思ったりすることから始められる。全学年の実践データから、さらに新しいことを発見することもできる。

本学生のアンケート調査でも地域を中心とした学習をほとんどが体験していた。また、中学校での職場体験は、キャリア教育を目的とした総合的な学習の時間である。小中連携した学びがあると効果的である。総合的な学習の時間では体験活動は必要条件である。目標の資質・能力の育成として(3)探究的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度」と

ある。身近な地域を教材とした職場体験をキャリア教育として小中高大として発展させたい。

大学講義としての総合的な学習の時間の課題もある。講義として総合的な学習の時間の課題はその価値理解を実感しにくいことにある。小中と印象的な体験をして残っているが、大学生になりもう一度自分を見つめ直したり、インターンシップをしたりする機会を講義に繋ぎたい。また教師になる学生が多くいるので、現場の実践から単元全体を通して、価値ある総合的な学習の時間として学ぶ必要がある。コロナ禍で実際に学校に行くことや、公開授業参観ができないことを工夫したシラバスを作成することが必要である。

また、一人一台のタブレットを持ち、小学校から使いこなすことや、プログラミング教育（技術・思考）も求められ、教科になりにくい数値評価ができないものは総合的な学習の時間に組み込まれる。創設当時から不変な価値と時代のニーズ対応する学習が全ての校種に求められている。

#### 引用文献

- (1) 水口 洋 (2015) 総合的な学習の時間の行方 国際基督教大学研究所論 35-45
- (2) 勝田 みな (2018) 「総合的な学習の時間」のこれまでの成果と今後の課題—小学校における「総合的な学習の時間」を中心にして— 名古屋短期大学子ども学研究論集 紀要論文 95-104
- (3) 子安 潤 (2019) 教科と総合の教育方法・技術未来の教育を創る教職教指針第7巻
- (4) 小学校学習指導要領（平成20年告示）解説 総合的な学習の時間解説編
- (5) 小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間解説編
- (6) (7) (8) 平成12年度 北九州市立門司海青小学校研究紀要

#### その他参考文献

- ・ 齊藤 孝 (2016) 社会人に必要な9つの力
- ・ 中学校学習指導要領（平成20年告示）解説 総合的な学習の時間解説編
- ・ 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総合的な学習の時間解説編
- ・ 独立法人教職員支援機構 中学校学習指導要領総合的な学習の時間のポイント
- ・ 初等教育資料（2020） No.990
- ・ 初等教育資料（2020） No.989
- ・ 文部科学省・国立教育政策研究所 OECD生徒の学習到達度調査2018年調査（PISA2018）のポイント 1-16
- ・ 文部科学省 小学校編（平成22年） 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開
- ・ 文部科学省 中学校編（平成22年） 今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開
- ・ 平成12年度 教育研究論文佐方個人論文 子どもの学びが豊かな心と生きる力を育てる 総合的な学習の時間の研究 ～地域を学習の場にした2年間の取り組み～
- ・ 平成11

#### 年度 北九州市立門司海青小学校研究紀要

- ・ 平成12年度 北九州市立門司海青小学校研究紀要
- ・ 平成12年度 福岡県教育研究協議会研究大会北九州市立門司海青小学校要項
- ・ 平成25年度 北九州市小中学校教職員教育研究会 国際理解部紀要

## Verification and future direction in the class of comprehensive learning period

Harumi SAKATA

Department of Education and Psychology, Faculty of Humanities, Kyushu Women's University  
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi 807-8586, Japan

### Abstract

There are a lot of students who acquire a license of a teacher of elementary and junior high schools (Japanese and homemaking course), a special support school teacher, a nutritional teacher and a special education teacher by a teacher-training course at this university. "Comprehensive learning period" is the learning which was established by a performed curriculum guidelines revision in 1998. The form of the learning that it's judged and a problem is settled more often in independent way found a problem personally, But as it had passed for 20 years, it started to be called like an evil of cram-free education. They were good at memorization, but children pointed out that there was a problem in the thinking power, judgement and the expressive power. Comprehensive learning period is a spiral of an investigation. The active learning by a Covid-19 pandemic is difficult. But a college student does the one how and what was learned from which in comprehensive learning period by elementary and junior high schools or what kind of experience activity and inspects the reality for whether inquiry learning has been done by this paper. And the necessity which is connected with the significance of time of the contents according to the needs and the overall learning of learning and the time to bring up the quality ability indicated by a revised curriculum guidelines revision in 2017 to a university from elementary, junior, and senior high school sounds future's directionality by making it clear.

**Keywords** : curriculum management, inguiring learning, active learning, practical activities, cross-curricular curriculum